

I 研究概要

令和5年度 研究概要

山形県立楯岡特別支援学校

研究主題

「一人一人の自己肯定感を高め、主体的に活動する姿を目指して」

(2年次／3年計画)

副 題 ～主体的に活動するための支援と手立ての工夫～

1 令和4年度（研究一年次）の取り組みについて

本校では昨年より「一人一人の自己肯定感を高め、主体的に活動する姿を目指して」を研究主題に、学校教育目標「『チャレンジ』と『関わり』を楽しみ、よりよく生きる人を育てる」の達成を目指して学校研究に取り組んでいる。

研究一年次である令和4年度は、研究主題の「一人一人の自己肯定感を高め」に焦点を当て、それに迫るべく副題を「教科横断的視点を生かして」と設定した。学部内研究グループごとに対象児童生徒を定め、その児童生徒に有効な支援と手立てをバトンのように複数の教員でつなぎ、教科横断的に一人一実践を行った。その中で、児童生徒個々の学習に対する「やった。」「できた。」などの思いを積み重ね、心を育てることにより、自己肯定感を高める取り組みを行った。子供たちにとっては、心を耕し学ぶ土台作りを行ったと言える。また、我々教員にとっては、子供たちが「やった。」「できた。」と目を輝かせる瞬間を共有することで、学ぶ喜びを感じられる授業づくりを改めて実践する機会となった。さらに、一年間実践を継続することで、それまでイメージしにくかった自己肯定感を捉え直す機会となり、どの学部においても、子供たちの自己肯定感の高まった姿の変容がみられた。

一年次は学部内での取り組みが主だったため、二年次は、学部を超えての情報や成果、課題の共有が必要だとの課題が明らかとなった。実践を共有していくことで、いかに他学部での取り組みを吸収し、蓄積していくかが二年次の要となる。

＜研究一年次の成果＞

自己肯定感を高めるために有効な支援と手立て

小学部

- ・興味関心の高い教材
- ・肯定的な声掛け
- ・短い時間の活動
- ・シンプルな活動

等

中学部

- ・自分での選択・決定
- ・メンバー編成
- ・見通しのもとせ方
- ・支援方法の統一

等

高等部

- ・意図的なペアリング
- ・発表場面の設定
- ・認め合う雰囲気作り
- ・ICTの活用

等

2 令和5年度（研究二年次）の副題設定について

前述にある通り、一年次は自己肯定感を高めることで「学びの土台作り」を行った。研究二年次である令和5年度は、以下のような視点から研究をより発展的なものとしていきたい。

まず一つ目は、一年次に育んだ自己肯定感を土台とし、子供たちが「自分でやってみよう。」「もっとやってみよう。」と学びに向かう姿を育てていくことである。子供が

自分から学習に向かう姿を引き出す研究を目指したいと考える。そのための支援や手立てとは何か、どのような工夫ができるかという視点から、副題を「主体的に活動するための支援や手立ての工夫」と設定した。支援や手立てには、教材・教具や場の設定、教師の支援など様々なものがある。我々はそれを日々実践しているわけだが、二年次は特に「子供が自分から学びに向かおうとする（＝主体的な学び）支援や手立て」に焦点を当てたい。

三年次である来年度は、この研究の総括となる。そこに向けて、この二年次では上記の子供の主体的な学びにつながる部分を重点として取り組むこと、またそのための支援と手立ての工夫について研究を深めることによって、目指す「主体的に活動する姿」に迫っていきたいと考える。

＜「支援と手立て」のイメージ＞

4年前の学校研究の中で取り組んだ、＜チャレンジしたくなる授業づくりの3つの視点＞を参考に「主体的に活動するための支援と手立ての工夫」を考察してみる。

個：個への手立て

全：学習グループ全体への支援

両：個とも全体ともいえる支援と手立て

＜魅力的な題材設定＞	＜達成感、満足感＞	＜安心感、共感的理解＞
両：興味関心	個：適した活動量	個：場の設置
個：やったことのないこと	全：出来高表	個：教師や友達と一緒に
個：好きなことや得意なこと	個：補助具の工夫	個：見通し
全：単元構成	全：子供にとってゴールが分かる	全：視覚的に手順が分かる
全：導入の工夫	全：振り返りの時間の設定	個：児童生徒のペアリング
全：前後の単元とのつながり	個：教師や友達からの称赞	個：言葉掛け
全：ゲストティーチャー	個：成功体験	両：拍手
全：地域資源の活用	個：昨日よりうまくいった	個：うなずき
両：教材教具		全：時間的なゆとり
両：ICTの活用		両：友達や教師のモデル
全：完成品の提示		個：繰り返しの学習
全：わかりやすさ		個：雰囲気作り
		全：教師や友達との信頼関係

（研究実践集第8号より抜粋）

3 研究の方法（二年次）

方法においては、一年次の取り組みで課題であった実践の共有に取り組んでいく。具体的には、学部内での取り組みを、事後研究会などで効果的に共有していきたい。そのための手段の一つとして、Jamboardの活用を予定している。Jamboardは、グループ同士での情報共有を非常に簡単に、分かりやすく行えることで、情報の共有には有効である。ICTを活用していくことは、教員の技能の向上だけでなく、ひいては子供たちの授業におけるICTの活用にもつながるため積極的に取り入れたい。

また、情報の共有は実践の蓄積にもなる。主体的な学びにつながる支援や手立てをより多く共有し蓄積することで、学校全体の専門性を高めていきたい。さらに、総括である三年次は、今年度の共有による貯えを活用することで、より子供の学びを高められるようにしていきたい。

今年度は、以下のように各種研究会等を計画している。

- (1) カリ・マネの日の設定 (①5/2、②7/24、③12/4、④2/28)

各研究グループでの話し合いを通して、カリキュラム・マネジメントの三つの側面（①教科横断的な視点、②PDCAサイクル、③地域の人的・物的資源等の活用）に迫る。今年度は設定した年4回の日程でP-D-C-A（計画→実践→評価→改善）

のサイクルを行い、教科横断的な視点で年間指導計画に直しと改善、そして次年度への財産となるように記録・修正していく。

(2) 一人一実践

今年度も引き続き、5月～11月の期間で一人一実践を行っていく。各研究グループで対象児童生徒を決め、支援と手立てをバトンのようにつないで実践していく。昨年度のアンケートで、学部によって取り組む難しさもあげられたことから、各学部の研修部を中心に研究グループメンバーや対象児童生徒の数について調整して取り組んでいく。年間を通して児童生徒の変容を捉える観点から、対象児童生徒一人につき教員は二人以上を基本とする。実践の最後に年間を通しての対象児童生徒の変容を各研究グループでまとめ提出する。

現段階では研究グループは、小学部2グループ（下学年、上学年）、中学部2グループ（Ⅰ・Ⅱ）、高等部4グループ（1年・2年・3年・AB）の合計8グループで考えている。

年間で設定されている研修日を活用し、一人一実践の紹介や情報交換、校内研・公開研に向けた指導案検討等を行っていく。

(3) 校内授業研究会（7月14日）

公開授業研究会の前段階として高等部において提案授業を行い、具体的な授業研究会の進め方、指導案の形式（指導案で注目してほしいポイント・児童生徒の細かい実態）、事後研の持ち方等について共通理解、実践研究を行っていく。（三年次の校内授業研において、全学部で提案授業を実施する予定。）

なお、この事後研究会において最初のJamboard活用を行う予定である。

(4) 公開授業研究会（11月29日）

地域のセンター的機能としての役割も果たしながら公開授業研究会を開催する。小学部と中学部から授業を提案し、研究テーマに迫っていきたい。校内授業研と同様、事後研究会ではJamboardを活用する。

今年度は、研究実践のまとめの一つとして、教員一人一人の実践について簡単に集録したい。各種研究授業などで共有した支援や手立てを、一人一実践や日々の授業の中で実際に活用し、その結果どうであったかの記録を残しておくようにする。

<その他の取り組み>

(1) 外部講師招聘研修Ⅰ（7月27日）

外部講師招聘を通して、最新の教育界の動向や研究テーマに迫った分野を含む学習指導についての内容について研修を行う。昨年のアンケートで希望の多かった「目標」と「評価」について、山形大学附属特別支援学校の近藤真知子教諭を講師にお招きし、同校の教育実践を紹介いただきつつ、学習指導要領を踏まえた実践的な研修を実施する。

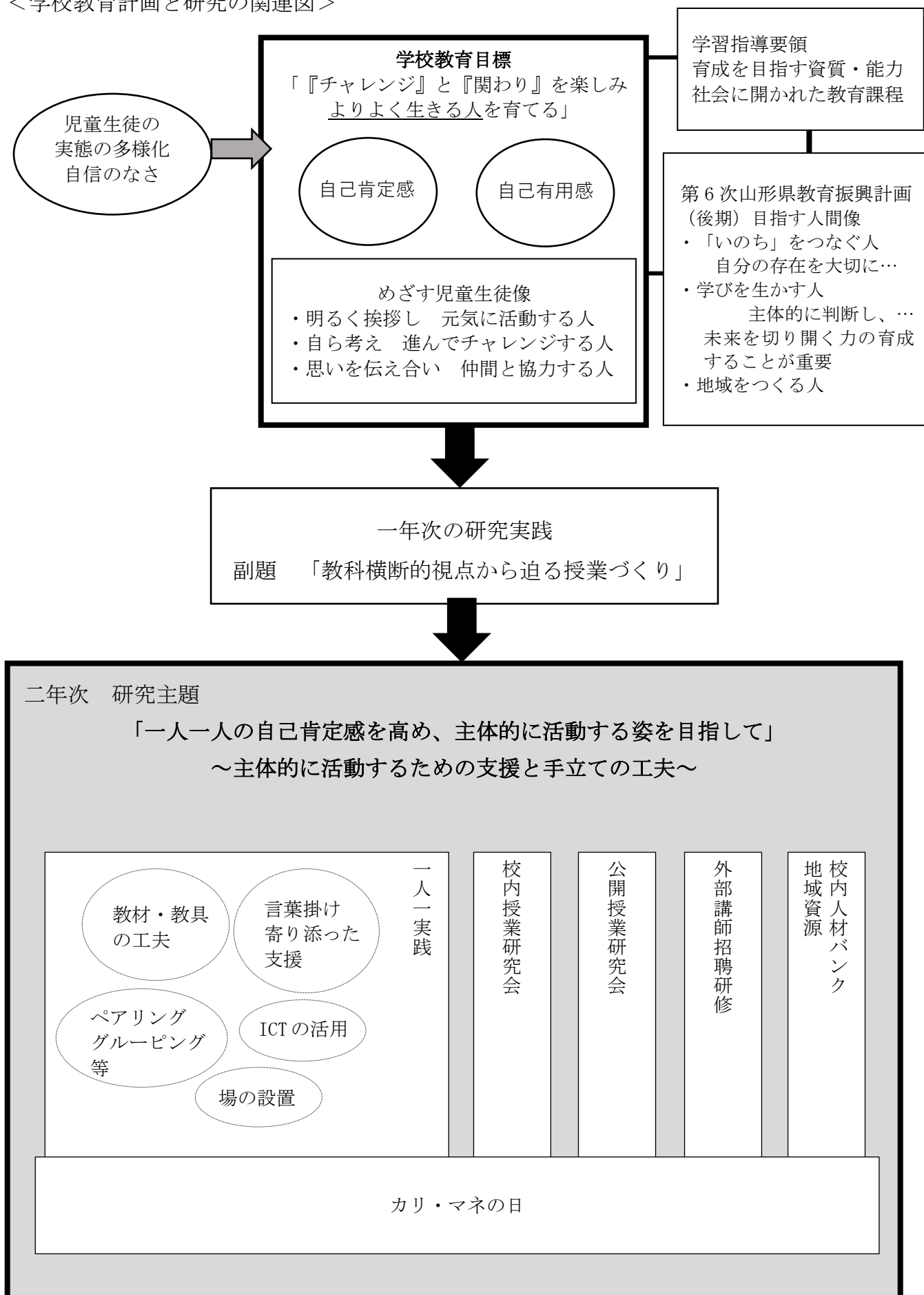
(2) 外部講師招聘研修Ⅱ（12月12日）

山形大学大学院教育実践研究科准教授川村修弘氏をお招きし、「知的障がい児の自立活動」をテーマに講演を行う。「よりよい生活の実現に向けて」をサブテーマとし、目標設定、評価、伝える力を引き出す指導など、実践的な指導について研修を行う。

(3) 校内人材バンク・地域資源の紹介（4月～）

本校の財産である地域資源マップを新任者の先生方に配付したり、校内人材バンクを令和5年度版にして更新し、職員に配付したりを考えている。夏休みを活用しながら先生方の得意な分野を持ちより情報交換の場の設定も昨年度同様に考えている。

<学校教育計画と研究の関連図>



4 令和5年度 研修日程

月	日	曜	研究協議会	学校研究に関すること	現職教育に関すること
4	10	月	研究推進委員会Ⅰ 研究概要について		
	11	火	分掌部会		
	26	水	新任者研		
	27	木	全体研究会Ⅰ	研究概要、指導案形式 カリ・マネ表など	
5	2	火	授業づくりの日 研修日① カリ・マネの日①	各学部研究進め方、グループ決定 公開研での授業者選定（各学部）	センター派遣依頼 (7/14 助言者指導主事)
	16	火	分掌部会	5/3～6/12 指導案検討 学部・学習グループ・研修部	5月中 外部講師選定
6	2	金	研修日②	各グループでの研修日	
	13	火	分掌部会	6/13 指導案起案	
	30	金		6/30 校内研指導案助言者へ送付	
7	11	火	分掌部会		
	13	木	終礼授業内容周知		
	14	金	校内授業研		
	24	月	カリ・マネの日②		
	27	木	外部講師招聘研修会		校内研修会「評価」
	28	金	研究推進委員Ⅱ		
8	17	木	分掌部会		
	24	木	全体研究会Ⅱ		
9	12	火	分掌部会		センター派遣依頼 (11/29 助言者指導主事 2名)
	27	水	研修日③	指導案検討（学部）	
10	3	火	研究推進委員会Ⅲ		
	11	水	研修日④	指導案検討（学習グループ）	
	16	月	分掌部会	指導案検討（研修部）	
	26	木		指導案起案	
11	1	水	研修日⑤		
	13	月		指導案助言者に送付	
	21	火	研修日⑥	公開授業前 準備日（学部）	
	24	金	終礼 授業内容周知		
	29	水	公開授業研究会		
12	4	月	カリ・マネの日③ 各研究グループの振り返り	グループごとの研究振り返り提出 一人一実践・授業内容訂正後提出	
	6	水	寒河江校公開研		
	8	金	大江校公開研 分掌部会		
1	12	金	分掌部会	実践集整理はじめ	
	17	水	研修日⑦	学部研究のまとめ	
2	6	火	分掌部会		
	7	水	研修日⑧		
	13	火	研究推進委員会④	今年度の取り組み 次年度の取り組みについて	
	28	水	カリ・マネの日④		
	29	木	全体研究会Ⅲ	実践集、研究概要 学部まとめ整理	
3	8	金		実践集 印刷・配信（CD-R・メール）	

Ⅱ 校内授業研究会

(1)

高等部 作業学習 家庭班 指導案

日 時：令和5年7月14日（金）

時 間：9：40～11：15

場 所：縫製室

指導者：T1 中村 桜 T2 木内 澄江
T3 加藤 隼 T4 斎藤 春季

1 単元名 「販売会に向けて製品を作ろう I」

2 単元の全体目標

- (1) 道具を安全に使用して、手順どおりに製品を作ることができる。 (知識及び技能)
- (2) 教師とコミュニケーションを取りながら作業を進めたり、デザインや色の組み合わせを考えて選んで作ったりすることができる。 (思考力・判断力・表現力等)
- (3) 販売会に向けて目標をもち、自分の仕事に集中して取り組もうとする。 (学びに向かう力、人間性等)

3 指導にあたって

(1) 生徒について

- ・本作業班は、1年生3名、2年生3名、3年生3名の計9名で、男子が6名、女子が3名である。昨年度から継続して家庭班に所属している生徒は1名で、残りの8名は初めての家庭班である。2，3年生は昨年度も販売会を経験しており、見通しをもつことができている。1年生も経験こそないが、中学部の校内販売会や、中学校の文化祭などのイメージがあり、製品を販売することへの意欲は高い。
- ・裁縫が好きで、手先が器用な生徒が多い。細かい作業なども時間を掛けて丁寧に行ったり、教師と作業内容を確認し、自分から取り掛かったりすることができる。その反面、長時間作業に取り組むことが難しい生徒や、立ち歩き等の個別の対応が必要な生徒など、実態は様々である。
- ・刺子布巾の作業では、4月より波縫いを行ってきたが、慣れてきたところで野菜や果物などの柄に取り組みたいと教師に伝える生徒がでてきている。また、他の生徒がミシンを使って刺子布巾を完成させている姿を見て、自分もやってみたいという気持ちをもち、挑戦する姿もある。新しい道具を使った製品作りや、新製品を作るときには楽しみにしている様子があり、そうした作業には一定時間集中して取り組むことがある。
- ・ビーズ通しの作業では、終わりが分かりやすいため、立ち歩きや長時間集中することが難しい生徒も自分から取り組む姿が見られる。また、繰り返しの同じ作業でも、見通しをもちやすく、安定して活動に取り組むこともある。
- ・作業中は、教師に「できました。」と伝えたり、自分なりに声を出したりして報告をすることがある。生徒同士での報告やコミュニケーションを取る機会は少ないが、他の生徒の出来栄を称賛したり、休憩時間に製品を見に行ったりする様子が見られる。
- ・一方で、同じ作業や単調な作業が続くと集中力が続かず、一つの作業を終えるのに普段より時間が掛かったり、ミスが続いてしまったりすることが多く見られる。ミスを修正するために、また同じ作業を最初から行うことになるため集中力が切れ、投げやりになったり、完成させることができずに達成感を得られなかったりすることがある。
- ・家庭班全体を通して、自分の作業に自信をもって取り組んでいる生徒が少ないため、報告する際に声が小さくなることがある。ミスがあると分かっているにもかかわらず教師に報告することができず、声を掛けてもらうまで待っている時もある。

対象生徒	・主体的に活動する姿に対する実態 ☆期待される主体的に活動する姿
M・H	・特定の生徒の様子が気になり、遠くから声を掛けたり、指示をしたりして自分の作業がおろそかになることがある。しかし、ミシン掛けなど自信がある作業や、好きな製品作りなどの工程のときは、一定時間（１５分程度）集中して作業に取り組む姿が見られる。 ・単調な工程が続くと居眠りをしたり、失敗が続くと投げやりになったりして、ミスをして報告しないことがある。 ・経験したことのある作業でも、周りの様子が気になり集中が途切れると次の工程を忘れてしまい、何度も教師に確認したり、必要以上に時間が掛かったりすることがある。工程表が手元にあることで、集中力が途切れてしまっても次にやるべきことが分かり、再度取り組む様子が見られる。 ・教師全員に完成した製品を見せて称賛されたときは、安心した表情になり、次の活動に自信をもって取り組む様子がある。また、他の生徒の出来栄を見て称賛の言葉掛けをすることがある。 ☆自分で工程を確認しながら作業を進める。 ☆一定時間（１５分程度）自分の作業に集中して取り組むことができる。
	単元の個別目標（対象生徒）
	（１）ミシンを使って、手順どおりに製品を作ることができる。 （知識及び技能） （２）デザインや色を考えたり、教師に報告や相談をしたりしながら作業をすることができる。 （思考力、判断力、表現力等） （３）集中して自分の作業に取り組もうとすることができる。 （学びに向かう力、人間性等）

（２）教材観

- ・本単元では「たてとく祭」での販売を目標に、それぞれの生徒がミシンを使った布製品作りのグループ、刺子の模様付け製品グループ、ストラップ作りグループの３つのグループに分かれて製品作りに取り組んでいく。お客様に販売するという明確な目標があることで、数量を意識して作業に取り組むことができる。また、販売会へのイメージや経験があることから、「〇〇さんに買ってもらいたい。」「〇〇さんに似合いそう。」などと生徒自身が購入する人のことをイメージしながら製品作りをすることができるため、より丁寧に、正確に作ることができる考える。
- ・ミシンを使った布製品では、これまでは教師が購入してきた布の中から生地を選んで製品を作ってきた。本単元では、不要になった服や着られなくなった服を有志で募り、バッグやポーチなどの小物にリメイクする新製品を作る。服のリメイクはデザインが被りにくく、裏地を自分で選ぶことも含めて一点物の製品を作っているという特別感がもてることで、制作への意欲を高めることをねらっている。また、これまでに作ったことのない新製品を作るという活動は、自分からやってみたいと思う気持ちをもつことや、集中して作業に取り組むためのきっかけになるのではないかと考える。

（３）指導観

- ・生徒が自分で工程を確認しながら作業を進めることができるように、タブレット端末を使って作業工程それぞれの動画を準備する。自分で工程表を見ながら製品を作ることで、指示を受けながら製品を作るときよりも、より自分で作ることができたという気持ちになり、自信や達成感を感じることができる。
- ・生徒が自分から質問や報告ができるように、言葉掛けは最小限にする。特にミシンの不具合や縫い間違いなどの報告は声が小さくなったり、教師が気が付いて声を掛けてくれることを待つ場面が多く見られたりするため、初めは自分の言葉で伝えられるように指導しながら、少しずつ報告ができるように見守る。

主体的に活動するための支援と手立ての工夫	
・ ICT の活用では、自分で見て確認しながら作業に取り組めるように、作業の工程を動画に撮って準備しておく。 ・ 興味関心では、一定時間集中して作業に取り組むことができるように、対象生徒が好きな作業や新製品作りなどの教材を準備する。 ・ 場の設定では、集中して作業に取り組むことができるように、同じ製品を作るグループで座席を分けたり、ミシンや材料を席の近くに配置をして導線を整えたりする。	

4 指導計画 (○本時 本時33／34)

時間	主な学習内容
1～2	・ 昨年のたてとく祭の振り返り、グルーピングなど
○3～34	・ 製品作り

5 本 時

(1) 本時の全体目標

- ① 道具を安全に使用して、手順どおりに製品を作ることができる。 (知識及び技能)
- ② 教師に報告や相談をしながら作業をすることができる。
(思考力、判断力、表現力等)
- ③ 集中して自分の作業に取り組もうとする。 (学びに向かう力、人間性等)

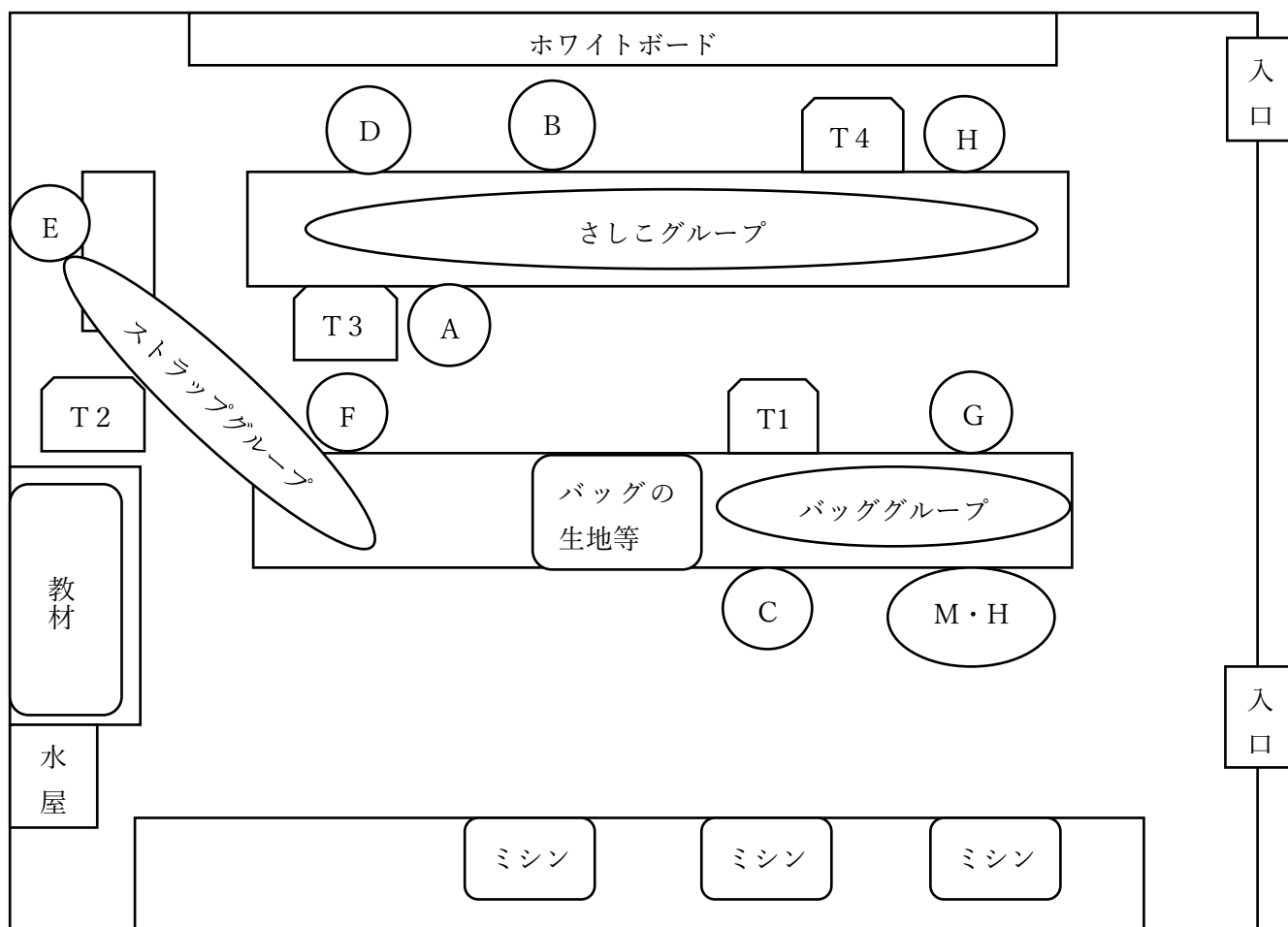
(2) 本時の個別目標

児童	本時の目標 (対象生徒)
M・H	(1) 道具を使って、工程表を見ながら手順どおりに製品を作ることができる。 (知識及び技能) (2) 教師に報告や相談をしたり、出来栄を確認したりしながら製品作りを進めることができる。 (思考力、判断力、表現力等) (3) 一定時間集中して自分の作業に取り組もうとする。 (学びに向かう力、人間性等)

(3) 展 開

時刻	活動内容	・指導上の留意点	☆主体的に活動するための支援と手立て
9:40	1 始めのあいさつ	・日誌に記入することができるように、今日の作業内容をホワイトボードに記しておく。	☆工程表を見ながら進められるように、タブレット端末を準備しておく。
9:45	2 活動内容の確認	・今日行う作業の見通しがもてるように、進捗具合や工程を口頭で確認する。	
9:47	3 作業を始める リメイクバッグ ・生地 の 採寸、裁断 ・ミシンでバッグ本体→裏地→持ち手部分と本体、裏地の順番で縫う	・工程表を見ながら進める。 ・できたときは称賛する。 ・集中して作業ができるように、場の設定に配慮する。	
10:30	4 休憩	・水分補給、トイレなどを済ませる。 (本時はここまで)	
10:40	5 作業	・引き続き集中して行えるように、声掛けをする。	☆達成感、満足感を感じ、作業に自信がもてるように、良かった点を一緒に確認しながら伝える。
11:00	6 片付け	・自分の作業の内容を振り返ることができるように、振り返りシートに感想などを記入して発表し、教師と一緒によかったところを振り返るようにする。 ・達成感を感じられるように、今日出来上がった製品を全員が見える位置に置き、称賛する。	
11:10	7 反省会		
11:15	8 終わりのあいさつ		

(4) 場の設定



1 授業者より

<本時の様子から>

- ・対象生徒が、研究会当日、朝から元気がなく集中力がなかったが、対象生徒なりに頑張っていた。(鼻をかむ回数が多い、iPadの工程表をずっと見ている、縫い方を失敗した、取り組むまでに時間がかかった)
- ・対象生徒は一つ作業が終わるごとに教員一人一人に見せに行く。
 - 褒めてもらうが本人はさっぱりしている。
- ・振り返る力はある。丁寧で時間がかかる。
- ・失敗したくないタイプで普段は一つ一つ確認しているが本時は確認がなかった。

(気持ちが向いてなかった)

- ・いつもはもっと周りの生徒を気にしているが、今日は大人の目が多かったため、周りの生徒にはいかなかった。(必要以上に注意することもある)
- ・1学期最後の作業だったので、あえてあまり口を出さなかった。
- ・残念なところが目立ってしまった。
- ・「眠い」…社会に出たら通用しない。
- ・支援まだまだ必要。一人で立ち直れる段階ではない。
- ・目標設定や評価方法から見直したい。

<前時の様子から>

- ・対象生徒が、いつも自己肯定感が高いような評価をする。
(教員が見て、いまいちな日や明らかに失敗している日も高い評価をつけている、4月の2回目の作業学習からずっと同じ評価)
- ・集中の意味や評価方法がわかっていないのではないか。

2 ご指導 : 山形県教育センター 伊藤 綾 特別支援教育課指導主事

<協議について>

- ・ICTが活用されていてよかった。
- ・教師の優しい話し方、失敗したことや自分で気づけたことへの称賛・声掛けがよかった。
- ・作業内容がよかった。(好きな作業や好きな製品)

<今後に向けて>

- ・場の設定。(必要のないものはしまう)
- ・作業内容(短い期間でできるもの、工程を分担する。)
- ・間違いやすいところをピックアップして、生徒が見られるようにする。
(静止画で良い悪いなどを示す手立てがあるといい。)
- ・休憩について(自分できりかえるまでギリギリまで待ち、自分から動くところを褒めるといい。)
- ・集中とは具体的にどのような姿か(集中できなかったときはどうするか)
- ・達成したいねらいをしぼり、振り返りシートを生徒によって変える。(振り返りやすいシートにする)

☆本人にとって達成感や満足感があるのはどんなときか

☆主体的に活動する姿を吟味する

<作業学習について>

- ・各教科等を合わせた指導。
- ・一人ひとりの資質能力を把握する。
- ・個々の実態、ニーズ、共同して取り組めるなどを考える。
- ・県教育ホームページ一覧表を活用する。

<その他>

- ・学習指導要領について(後半に対象生徒について情報をまとめると、見やすい)
- ・作品と製品の違い(買ってもらう人がいる意識)

<校長より>

- ・本人と出来栄えの確認をしていたのが良かった。
- ・具体的な目標が集中というところにつながる。

(2) 事後研究会の記録

校内授業研 事後アンケートまとめ

回答数 小12 中10 高17

1	指導案について良い点を記入してください。
小学部	・書きやすい指導案の形式、読みやすく分かりやすい、シンプル。 ・主体的に活動するための支援と工夫があるのが分かりやすい。 ・研究との関連がわかりやすく記載されている。 ・課題となる実態だけでなく、生徒達の良い面もしっかり記入されていた。 ・生徒についての実態が詳しく書かれており、イメージをもてた。
中学部	・生徒の行動や活動を分析でき、狙いたいポイントがわかりやすい様式。 ・個別の実態や主体的に活動するための手立てが記入できるため良い。 ・生徒の実態が詳しく記載されているので、VTRが見やすかった。 ・各項目が区切られていたので、文量が多くても見やすかった。 ・研究テーマに沿った主体的な姿についての記述がある。
高等部	・見やすい様式。対象児童生徒の実態が分かりやすくなっており、良かった。 ・対象生徒の主体的な姿と、その手立てが分かりやすい。 ・教科のねらいと、主体的に取り組むための手立て（研究テーマ）とで分けて目標や手立てが示されていてわかりやすかった。 ・対象生徒メインの書き方がいい。

2	指導案について課題・改善点を記入してください。
小学部	・児童生徒についての記載をまとめ、指導計画をもう少し詳しく書くと良い。 ・展開の部分が完結すぎないか。教材の写真はあえて載せていないのか。 ・目標の「集中」という言葉について、対象生徒にとっての集中する姿とは具体的にどのような姿なのか明記してあると良い。
中学部	・「個別の実態」の欄とは別に、期待する主体的に活動する姿とそのための支援と手立てを並列させた方がわかりやすい。単元の個別目標はなくても良い。 ・主体的にするための手立てとあるが、何が主体的なのかを明確にしたほうが良い。 ・合わせた指導の指導案について、何の教科を合わせた指導内容になっているのかの記述がない。評価の観点が無い。 ・対象児童の情報が一目でわかるように一箇所にとまとめると尚見やすかった。 ・指導計画の書き方がもっと詳しいと良い。
高等部	・他の児童生徒の実態について少し記載があるとありがたい。 ・目標があれば、それに対する評価する場面が必要。 ・全体の計画と個人についての記載を分けた方がよい。 ・単元計画が詳しく書かれていると、指導案を読んだ時に分かりやすい。 ・本時の展開に、または、その後に評価の観点があると見るポイントがはっきりするのではないかな。

3	授業研・事後研について良い点を記入してください。(Jamboard も含む)
小学部	・紙とペンが無いので手軽にできる。他のグループの話し合いが見られる。 ・意見のすり合わせ、共有のしやすさ。付箋よりも見やすい。 ・ジャムボードは先生方が慣れれば良い手段だと思う。大判用紙で保管する必要もなくなる。 ・学部を超えて話す機会が必要だと感じた。 ・表示の工夫（色や表）により、他グループの考えを理解しやすい。
中学部	・自分の思いを書きやすく、また一同に他の先生方の意見も見られる。 ・ジャムボードについて事前研修があったので、スムーズに使うことができた。慣れればこちらの方がやりやすい。 ・ファシリテーターを務めたが、グループの先生方が話し合いをしてくれたり、助けてくれたりしてとても進めやすかった。 ・助言者の方に作業学習のあり方について教えていただき、全体で確認できたことが良かった。 ・事後研で全員が発言する機会がある。
高等部	・タブレット端末を使った事後研が良かった。無駄な紙がいらない。 ・自分自身の授業への改善につながった。 ・タブレットを使うことで、グループだけでなく全体の意見も見ることができて良かった。 ・予め話し合いの視点が示されていたことが良かった。 ・操作は不慣れで難しかったが、他のグループの内容も覗けるなど良い点がたくさんある。検討しやすかった。 ・いろいろな意見や考えを知ることができ勉強になる。授業研を前向きに捉えていきたい。

4	授業研・事後研について課題・改善点を記入してください。(Jamboard も含む)
小学部	・協議の進め方が難しい。入力に慣れていない人にとって時間がかかる。 ・事後研の時間はそんなに多くいらない。付箋の時間が多い方がいい。 ・意見に名前を書くのは、抵抗があると感じた。 ・今回の実践から自分の授業実践に生かすことを考えることはよいが、それであれば一実践についても振り返りを行った方が今後に生きる。授業研や一実践についてもしっかり目的意識がもてるようにすべき。
中学部	・①付箋の記入時間を各グループでの活動時間内に入れると、紙でやっていた時のようなワイワイ感が出て良い。②可能なら各グループにテレビを置く。各タブレットで付箋記入→代表のタブレットをテレビに映し出して並べ替え作業ができると良い。 ・ファシリテートの方法について共通理解が必要。記録者の役割を設け、付箋を囲む、タイトルつけるなどすると授業者の負担感がもっと少なくなる。 ・ビデオ視聴は、静かに集中して行いたい。自評は、グループでの話し合いの前に聞きたかった。 ・協議内容についてのまとめがなかった。授業映像の音声の不十分だったため、記録は iPad でなくビデオ録画の方が良いのでは。

高等部	・ジャムボードが記入しやすかったが、不具合については対応が必要。 ・事後研の時に、映像を見ながら授業担当者の考えが聞きたかった。 ・生で授業を見る時間が欲しい。 ・動画視聴のとき、授業者が解説するか、授業の様子、生徒の声や授業者の声が聞こえるような工夫があると良い。自評はグループ協議の前にあると良い。 ・より普段の様子を参観してもらえような環境を整えられると良い（参観人数や撮影方法など）。定点撮影だと音声聞きとりづらいか。 ・付箋への記名は必要ない。黄色の付箋について、他学部の実践から自分の一実践に生かしていくという視点で記入するのが難しかった。 ・グループ毎の話し合いは会場を分け、協議の焦点を明確にする。
-----	---

5	校内授業研 I で学んだことや感想等を記入してください。
小学部	・具体的な目標と評価の重要性。タブレットのさらなる活用の必要性。 ・共有の時間、自分の実践ではどう取り入れるかを考えた時、自分の授業にも活かしていけると思った。 ・目標の意識のさせ方。自分のクラスでも、目標や振り返りを児童に意識させる形でしていきたい。 ・やはり基本は指導要領ということ。もっと読み込まなければならない。 ・主体的に活動するための手立てとして、教師の直接的な関わりや教材教具の他に、場の設定や授業前の関わりなども大切なことであると感じた。 ・他学部の先生方と意見交換ができてよかった。
中学部	・以前のように付箋に書くよりは良い。あわせて、指導案に入力する内容をある程度まとめながらジャムボードの記入が必要と感じた。 ・やって終わりではなく日々の授業実践に活かしていきたい。 ・活動に向かったから良しではなく、本質的な集中を求めることはどの年代のどの授業でも大切なことだと感じた。 ・具体的な目標設定、生徒が理解して納得いく表現ですること。 ・指導案の書き方、授業前から心に向かわせるということが大切だと分かった。 ・生徒の実態の見取り、集中力が課題の生徒への支援とは。
高等部	・日々の目標設定の大切さを感じた。生徒自身が考えていくことで、責任ややりがいを感じて取り組んでいくことができると思う。 ・学習指導要領を見ること。 ・成功体験につなげるための指導過程を深く考えるきっかけとなった。 ・生徒の実態を把握した上での目標設定の大切さ。振り返りの仕方。 ・目標について、具体的に教師と生徒との擦り合わせが必要。 ・集中するとは具体的にどういう状態なのかを生徒と確認するなど、目標や指示の言葉を具体化して示すことの大切さを感じた。 ・付箋を大判用紙に貼り付けるよりも、Jamboard は後から情報を共有したり見直したりする上で有効である。 ・いつでも学ぶ姿勢を大切にしていきたい。